

第3回国際および日中合同熱測定シンポジウム

The International and the Third Sino-Japanese Joint Symposium on Thermal Measurements

第3回国際および日中合同熱測定シンポジウムが6月6日から9日まで中国陝西省の首都、西安市の西安賓館で開催された。

日中合同熱測定シンポジウムが開催されるようになった経緯については、すでに第1回のシンポジウムのレポート¹⁾で紹介したが、今回は第1回の杭州市の浙江大学、第2回の近畿大学に続き、第3回に当たる。第2回までは、日中合同熱測定シンポジウムという名称であったが、これまでに日中以外の参加があり、さらに将来ESTACとNATASに続く、第三の広域的なシンポジウムへの発展を目指して、日中以外の国からも多数の参加者があることを期待し、国際の文字が加えられたが、当初参加が予定されたロシアのPotekhin博士とカナダのWei博士が欠席し、実質的には日中のシンポジウムとなった。

第1日(6月7日)は、8:15から開会式が行なわれた。組織委員長の嚴文興教授(浙江大学)の司会で、閻海科博士(中国科学院)の開会の挨拶の後、日本側を代表してICTAC会長でもある日本熱測定学会会長小沢丈夫博士、日本側の実行委員長菅宏教授の挨拶があり、菅教授からは1996年に大阪で開催される第14回IUPAC化学熱力学国際会議(ICCT-96)の紹介と参加の勧誘があった。コーヒーブレイクの後、日本側と中国側と交互に口頭発表が行なわれ、日本側5件、中国側6件の報告があった。

第2日(6月8日)は午前中に日本側3件、中国側4件の口頭発表があり午後からエクスカージョンが行なわれた。

第3日(6月9日)は午前中に日本側3件、中国側3件の口頭発表があったが、中国側の参加者の大部分が午後の北京行きの列車で帰ることになり、11:35から急ぎで閉会式が行なわれた。日本側を代表して実行委員の高木定夫教授、中国側を代表して嚴文興教授の挨拶があり、次回は1999年、日本での再会を約束して閉会式を終えた。午後からは日本側参加者と残留した中国側参加者で、日本側3件の口頭発表が行なわれた。

今回の発表は熱分析と熱量測定の広い分野にわたっていたが、中国側の発表で多かったのは溶液および生体関連の分野で、日本の熱測定討論会と異なり装置に関するものが少なく、日本では珍しい発表として、爆薬に関する報告が数件あった。これまでのシンポジウムに比べて、



中国側組織委員長嚴文興教授の開会式の挨拶

今回は中国側の若手研究者の活躍が印象的であった。

口頭発表と平行して、コーヒーブレイクの時間を利用して40件以上のポスター発表が行なわれた。中国側の発表者のなかにはこの発表形式に不慣れなためか、説明者がまったく現れないポスターもあり、座長から「発表者は必ずポスターの前に立つように」との注意があった。また、口頭発表の会場の壁面を利用してポスター発表を行なったため、スペースが足りず、中国側の発表者でポスターを貼る場所がない人も数名いたとのことである。さらに、プログラムが西安に到着するまでわからず、当日になってどんどん変更されるのも日本側の参加者にとっては戸惑うことであった。これらの運営上の不手際も、今後回を重ねることによって改善されるであろう。

今回の参加者は、日本側からは同伴者5名を含めて33名、中国側は名簿がないので正確な数は不明であるが、中国側出席者によると約60名とのことである。

西安(長安)は中国のなかで、もっとも日本人の思い入れの深い場所である。今回のシンポジウムでも、6日および8日午後のエクスカージョンとして、西安城壁、兵馬俑、大雁塔、碑林、華青池などを見学した。学会での成果とともによい思い出となるであろう。

最後に、今回のシンポジウムの開催にお骨折り頂いた嚴文興教授をはじめとする中国側の実行委員諸先生、日本側の実行委員長菅宏教授、実行委員の高木定夫教授、小沢丈夫博士、日本側参加者のために中国側との交渉を一手に引き受けた木村隆良博士に感謝の意を表します。

1) 中村茂夫, 熱測定 14, 87 (1987).

(神奈川大学工学部 中村茂夫)